

【翻 訳】

ドイツ連邦大統領
フランク・ヴァルター シュタインマイヤー博士の演説
ヨーロッパでの民族社会主義からの解放および第二次世界大戦
終結75周年記念に際し、戦争と暴力支配の犠牲者のための
ドイツ連邦共和国中央記念施設 (Neue Wache 新たな見張り) にて
(2020年5月8日ベルリン)¹

齋 藤 義 彦 訳

今日から75年前にヨーロッパで第二次世界大戦が終結しました。

1945年5月8日は、民族社会主義の暴力支配の終焉、爆撃の夜と死の行進の終焉、例を見ないドイツ人による犯罪とユダヤ人虐殺という文明の破綻の終焉でした。抹殺戦争が考案され出発したここベルリンで、やがては途方もない破壊を伴って抹殺戦争が帰還したこのベルリンで私たちは今日共に記念の機会を持つとうとしました。

私たちは、この大陸を多くの犠牲を伴いながらも解放した西側と東側の旧連合国の代表と共に、記念の機会を持つとうとしました。ドイツの占領下で苦しめられながらも和解の用意を持ったヨーロッパのあらゆる地域からの私たちの隣人たちと共に。ドイツ人による犯罪を生き延びた人々と犠牲者の遺族の方々と共に。彼らの多くは私たちに和解の手を差し伸べてくれました。この国に新たに出発する機会を与えてくれた世界の人々と共に。²

私たちはあの時代を自ら体験したこの国の高齢の方と共に記念の機会を持つとうとしました。飢餓、避難、暴力そして追放、これらすべての苦しみを子供の時に経験した人々と共に。戦後この人々が西側でも東側でもこの国を再建したのです。

またこの過去が自分たちに一体何を語るのかと問う三世代後の青年たちと共に記念の機会を持つとうとしました。彼らに私は呼びかけます。君たちに係っています。この恐ろしい戦争からの教訓を未来に繋げることができるのは、君たちを除けばいないのです、と。まさにそのために世界中の何千という青年をベルリンに招待したのです。かつて父祖が敵同士であったにもかかわらず、今日友

となった青年のことです。

このように私たちはこの5月8日を共に記念する機会を持つとしました。しかしコロナ禍のために私たちは単独で記念せざるを得なくなりました。私たちにとって大切な、感謝している人々と離れて。

この単独であることは私たちを再びあの1945年5月8日に瞬間であれ送り返すことになったかもしれません。なぜなら当時ドイツ人は実際孤独でした。ドイツは軍事的に制圧され、政治的、経済的に地に堕ち、道徳的に破産していました。私たちは全世界を敵としてしまったのです。

75年後の今日私たちは再び単独で記念しなくてはなりません。しかし私たちは孤立していません。これが今日のうれしい知らせです。私たちは強靱で、確固たる民主主義の中で暮らしています。ドイツ統一後30年経過し、平和で統一されたヨーロッパの心臓部にあります。私たちは信頼を享受し、世界中からの同盟と協力の果実を摘み取っています。確かに私たちドイツ人は今日、解放の日は感謝の日となった、ということができるとのことです。

私たちは解放の日を心から告白するようになるまで三世代を要しました。

確かに、1945年5月8日は解放の日でした。しかしこのことはまだしばらく人々の頭で理解し、心から受け入れられるものではありませんでした。³

1945年の解放は外からやってきました。それは外から来なければならなかったのです。それほどこの国は自らの凶行、自らの罪に深くかかわっていたのです。ドイツの西側での経済再建と民主的再出発もまた、私たちのかつての敵国の寛容、先見の明そして和解の用意があって初めて可能になったのです。

しかし私たち自身もこの解放の一端を担っていました。それは内的解放でした。それは1945年5月8日にではなく、ある日突然にでもなく、それは長く苦痛を伴う道程でした。それは共に知り、ともに犯したことについての解明と啓蒙、家族の間、世代の間での容赦のない問いかけ、沈黙と抑圧に反対する戦いでした。

それは私たちの世代の多くが徐々にこの国と和解した数十年でもありました。それはヨーロッパの統合過程や東方外交による平和条約の締結に結実することになる、数十年でもありました。⁴ それは私たちの隣国に新たな信頼を生み出し、慎重な接近を可能にしたのです。それは私たちの大陸

の東側で勇気と自由への愛を壁によって閉じ込めることを不可能にした数十年でした。それはもう一つの解放の幸運な瞬間にまで続いたのです。つまり平和な革命と再統一という解放です。私たちの歴史と格闘したこの数十年の中で、ドイツの民主主義が成熟することができたのです。⁵

この格闘、この格闘は今日まで続いています。想起には終わりがありません。私たちの歴史の呪縛を解くものはありません。なぜなら想起がなければ私たちは未来を失うからです。

私たちドイツ人が歴史を直視し、私たちが歴史の責任を引き受けたために、ただそれだけで世界の諸国民は私たちの国に新たな信頼を与えてくれたのです。ですから私たち自身もこの国に信頼を置くことが許されるのです。ここに啓蒙された民主的な愛国主義があるのです。蹉跎のない、光と影を共に見ようとしなさい、喜びと悲しみのない、感謝と恥のないドイツの愛国主義は存在しないのです。ラビであるラッハマン師は「傷んだ心ほど完全な心はない。」と語っています。ドイツの歴史は傷んだ歴史です。数百万回の殺害と数百万回の危害を含んだものです。このことが私たちの心を今日まで苦しめています。ですからこの国は傷んだ心を持って初めて愛することができるのです。

このことを耐え忍ぶことができない者、幕引きを求める者は、戦争とナチスの独裁を隠蔽するだけではありません。この者は私たちがその後獲得してきたすべての善を無にする者です。それどころかこの者は私たちの民主主義の本質をなす核を否定しているのです。

つまり「人間の尊厳は不可侵である」という民主主義の本質をなす核のことです。アウシュヴィッツで起こったこと、戦争と独裁の中で起こったことが、私たち皆にわかるように、私たちの憲法の第1条に書き込まれ続けているのです。否、想起が重荷なのではありません。想起しないことが重荷となるのです。責任を認めることが恥なのではありません。否認することが恥なのです。

ところで75年後の今日私たちの歴史的責任は何を意味しているのでしょうか。私たちが今日感じている感謝の気持ちは私たちに気の弛みをもたらすものであってはなりません。その逆です。想起は私たちに責任を求めているのです。

「二度とあってはならない」と私たちは戦後誓いました。しかしこの「二度とあってはならない」という誓いは、私たちドイツ人にとってなかんずく「二度と単独であってはならない」ということを意味しています。この誓いは他でもなくヨーロッパで通用しなければなりません。私たちはヨーロッパを結束しなければなりません。私たちはヨーロッパ人として考え、感じ、行動しなければなりません。この世界規模の疫病の最中そしてその後に私たちがヨーロッパで結束しないのであれば、私たちは5月8日に恥じることとなります。ヨーロッパが失敗すれば、「二度とあってはならない

い」という誓いもまた失敗するでしょう。

世界共同体は「二度とあってはならない」から学びました。世界共同体は1945年以降破局からの教訓を共通の基礎に刻み込みました。つまり人権、国際法、平和と協働のための規則です。

あまりにも多くの凶行がなされた私たちの国は、年を重ねる中でこの国際秩序の紊乱者からその後援者へと変貌しました。私たちはこの平和のための秩序が目前で雲散霧消するのを座視することはできません。私たちはこの秩序を作った人々がこの秩序から離反していくことを甘受するわけにはいきません。私たちは、疫病の世界的流行に対する戦いの中でも、世界における、より少ない協働ではなく、より多くの協働を求めます。

「5月8日は解放の日でした。」このリヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーの有名な言葉を私は今日あたらしく、違った仕方でも読まなければならないと信じています。当時この言葉は私たちの歴史との格闘の中での里程標となりました。しかし今日この言葉は私たちの未来に向けられなくてはなりません。つまり「解放」は決して完結するものではなく、私たちが受動的に経験するものでもありません。この言葉は私たちに、毎日繰り返し、活動を促しているのです。

当時私たちは解放されました。今日私たちは自ら自己を解放しなければなりません。

新しい民族主義の誘惑からの解放。権威主義者の魅力からの解放。民族間の不信、閉鎖、敵意からの解放。憎悪と迫害からの解放。外国人排斥と民主主義の蔑視からの解放。なぜならこれらはあの古くからの悪霊が新たな装いのもとに現れているだけだからです。私たちは今日5月8日にハーナウ、ハレ、カッセルの犠牲者も共に追悼します。彼らはコロナによっても忘却されることはありません。⁶

「ここで実現できれば、いたるところどこでも実現できます。」このように私たちに、イスラエル大統領ルーヴェン・リヴリンが今年ユダヤ人大虐殺の記念日にドイツ連邦議会で呼びかけました。ここで実現できれば、いたるところどこでも実現できます。しかし今日私たちをこの危険から解放してくれる人はどこにもいません。私たちは自分自身で成し遂げなくてはなりません。私たちは自己の責任を果たすように解放されたのです。

今年の5月8日が大きな転換と大きな不安の中にあることを私は自覚しています。コロナの世界的流行のみがその原因ではありませんが、その契機となったことは確かです。私たちは今日この危機からどのように、いつ脱出できるかを知りません。しかし私たちはどのような姿勢でこの危機に

臨んでいるかを知っています。この国と私たちの民主主義、そして私たちがともに責任を負うことができることへの大きな信頼を伴う姿勢です。このことが私たちが75年の間にいかに前進することができたかを物語っています。そしてこのことが私に、将来私たちが何に直面するのであれ、希望を与えてくれるのです。

親愛なる市民の皆さん、コロナのために私たちはともに想起することができません。記念行事を行うことができません。しかし私たちはこの静寂を利用しましょう。黙想しましょう。すべてのドイツ人に私は求めます。今日は戦争と民族社会主義の犠牲者を黙想の中で記念してください。皆様の出自がどこであれ皆様の記憶、皆様のご家族の記憶、私たちの共通の国の歴史を問い返してみてください。解放、5月8日が皆様の生活と行動にどのような意味を持つのかを思念してください。

戦後75年が経過し私たちドイツ人は多くのことに感謝することができます。しかしその間育まれてきたこの善は、一つとして永久に保障されているわけではないのです。ですからその意味でも5月8日は解放の終点ではなかったのです。自由と民主主義はむしろこの日に課された持続的な課題、私たち自身の課題なのです。

訳注

- ¹ 第二次世界大戦終結75周年記念の演説。ドイツは1945年5月8日に連合軍に対し無条件降伏文書に署名した（ソ連軍に対しては翌日5月9日）。コロナ禍のために例年ヨーロッパだけでなく世界中からの招待客を迎えて行われてきたこの記念式典が、招待客のない三権の長ら主催者のみとなる異例の式典となった。この演説の中でシュタインマイヤー連邦大統領（ドイツ社会民主党SPD）は1985年同日のヴァイツゼッカー大統領（キリスト教民主同盟CDU）の「荒野の40年」演説に言及し、5月8日が敗北ではなく、解放の日であったことの意味を問いかけている。シュタインマイヤーは、戦争責任の直視による未来の構築というその後中道諸派に受け継がれ、ドイツ政治の土台となるヴァイツゼッカーの歴史認識を共有している。しかしシュタインマイヤーはこの演説の中で、今日的世界的な右派ポピュリズムの台頭（ドイツではドイツのための選択枝党）やドイツ国内での右翼テロリズムの頻発を踏まえ、人間の尊厳を擁護するための継続的な解放の努力という新たな意味を強調した。外からの僥倖であった解放を継続的な国民による自己解放への努力へと転換することを求めている。
- ² 1963年のエリゼ（独仏友好）条約以降ドイツはフランスをはじめ旧連合軍首脳と第1次世界大戦、第2次世界大戦の終結を共同で記念してきている。
- ³ 初代首相アデナウアーの時代（CDU, 1945–1963）には過去の克服は政治課題ではなかった。1963年エリゼ条約を花道としてアデナウアーが引退し、同じCDUのエアハルトに首相が交代して初めて、アメリカでの集団訴訟という外圧の下ではあれ、ドイツ国内（当時西ドイツ）で戦争犯罪を追及する仕組み（フランクフルト・アウシュヴィッツ裁判）が制度化された。その後ナチスドイツの戦争犯罪の時効は段階的に撤廃され、今日（2020年）に至るまで継続裁判が行われている。

- 4 フランスの提案による石炭鉄鋼共同体条約から、リスボン条約に至るEU基本条約のこと。ブランド首相（SPD, 1969-1974）による東方外交はソ連とポーランドとの平和条約締結に結実した。これを受けブランドはさらに東西ドイツ基本条約の締結に成功し、後のドイツ再統一の道を可能にした。当初ブランドの東方外交に反発していた同盟 Union = CDU/CSU もその後この外交成果を追認することになる。
- 5 1990年のドイツ再統一は、ソ連でのゴルバチョフの改革に呼応した、東ドイツ国内での平和的な民主化運動に多くを負っている。この民主化運動はやがてドイツ統一を求める運動へと変化していった。またゴルバチョフのソ連が財政破綻の淵にあり西側との協調が唯一の選択肢となっていたこと、冷戦後の新世界秩序を求めているブッシュのアメリカの支援という世界史的な僥倖に恵まれていたことも背景となっていた。この状況のもたらした機会を抜け目なく利用し、ドイツ再統一という課題に取り組んだのがCDUのコール首相であった。
- 6 2019年6月にヘッセン州カッセル郡長のヴァルター・リュプケが右翼テロリストに殺害された。リュプケはCDU党员であり、2015年夏のメルケル首相の難民受け入れ政策を支持していた。それまで移民の背景を持つ市民が人種主義者の標的となって無差別に殺害されることはあっても、リュプケのような地方の政治家が殺害されることはなかった。そのためこの事件は右翼テロリズムの転機をなすものとして政界をはじめ、ドイツの社会に強い衝撃を与えた。しかしすでに2000年から2006年にかけて9人のトルコ系ドイツ市民を無差別に殺害したNSU（民族社会主義地下組織）による女性警察官の殺害は移民とは無関係であった。またケルン市長選挙中、排外主義に批判的であった無党派の市長候補者（その後現市長）が切り付けられ重傷を負った事件でも移民の背景を持たない政治家が標的になっており、反ユダヤ主義の扇動、外国人や移民系ドイツ人に対する扇動を批判する政治家の殺害はいつ起こっても不思議ではない状況であった。同年秋にはザクセン＝アンハルト州ハレ市で右翼テロリストが同市のユダヤ教教会を襲撃し、集団殺害を試みたが建物への侵入に失敗し未遂に終わった。その後犯人は無関係の通行人と移民系ドイツ市民を殺害し、母親を道連れにして自殺した。翌2020年2月にはヘッセン州ハーナウ市（グリム兄弟で著名）で10人の移民系ドイツ市民が無差別に殺害された。彼らの中にはEU加盟国のルーマニアやブルガリア出身者も含まれる。ドイツ統一後活発になった、ユダヤ系ドイツ市民、移民系ドイツ市民、非白人の外国人を標的とする極右の活動は、2014年に始まったイスラム系移民・難民の増加に反発する運動（Pegidaヨーロッパのイスラム化に反対する愛国ヨーロッパ人の運動）の高まりに呼応して再びピークを迎え今日に至っている。

（原文はドイツ連邦共和国政府出版情報局メール版による）